

幻想即興曲 I

安溪芙美子

ポプラ木立にかこまれた中国の奥地にある大きな修道院。常宋義先生はこのカソリック修道院の院長だった。そして芙太々タイタイは修道院の教師をしている日本人の妻君。彼女は女性だから修道院の中には入れない。夫の安先生が、日本人だからという特権は何につけ行使することをいやがった。彼女はもう八ヶ月の間一度も建物の中に入らず、外塀に接した番人小屋のよくな住居に起臥していた。戦争はもう終わりに近い。芙太々は毎日夫と一緒に竹槍かついで日本人小学校の庭へ「くんれん」に行く。惨めな竹槍ダンス。馬鹿馬鹿しくなつて途中で止めると居留民団のヒゲが詰らぬ顔を怒りに赤くして「ヒコクミン」と怒鳴る。ああもう竹槍ダンスより前に国民というスグれた代物にはなれない時節なのか。

太々は悲しくなつて泣く。ご飯を炊くのもいやになる。乾上がった安先生はムクれてどこかへ行つてしまう。「ああこんな異国の涯になど来るのぢやなかつた」優しい母の面影が胸の底に漲る。腹も充たさず喉も潤さず、太々は大きな赤毛の犬の背に滂沱の涙。ものいはぬ異国の犬だけがあたたかな思いをゆつたりした図体にただよわせて空しい太々のところをあたたためてくれる。

「太々どうしましたか、シヨンマース？」不図ふりむくと常宋義院長。「??」。芙太々には中国語不明白。「フンフン」院長さんはうなづいて地面に字をかく。「慕母？」ええそうなの。おかあさんに会いたい。お母さん、お母さん、慕母。ああ本当に慕母なの。お母さん、お母さん。お母さんどうして私こんなところに来て了つたのでしょうか。もう何もかもいや。お母さん、お母さん。お母さんに会いたいよう。お母さん、お母さん。太々は自制心も、はづかしさも忘れて、お母さんでもあるように常宋義先生の胸に顔を埋めて、お母さん、お母さんと泣

き叫ぶ。小柄な常先生は優しく背中などをなでていたがそのまま手を引いて建物の中へ彼女を案内する。「女人禁制」の掟が乱れた太々の頭を掠める。彼女はおそれて立止まる。「没関心、来、来」かまいません。よつていらつしやい。院長先生は居間の小卓に彼女を坐らせてどこかへ出かける。

「アッ、バイオリン」やがて出てきた先生の右手に抱えられた一丁のバイオリン。

「そうバイオリン」先生はゆつくりケースを開くと暫く目を閉じ思いを調える。流れ出した調べ。高く、低く、ゆるく、はやく、技量も優れ音色も豊かに、先生はいつまでもひきつづけていた。悲しみにあれ狂った芙太々の心もいつしか和み、不図生きるよろこびにも似たおもいが芽生える。

ありがたう院長さま。私はもう悲しみません。貴方のそのバイオリンは、バイオリンをかなでて下さったやさしいお心は、いつでも、いつまでも、私に希望をもつことを教へてくださるでしょう。太々は言葉に出せない感謝の目を柔らかな院長の面ざしにそそぐのだ。そして十二年。芙太々は今二人の息子と共に懸命にバイオリンを習っている。慕母に悲痛した若い日の自分と、慰めてくれた常先生のやさしい心をなつかしみ乍ら。そしていつの日にか二人の子供達が音楽を味わえることの尊さを体得できることを祈り乍ら。

(一九五六年十二月二日)